

高知県の沿岸

【現 状】

高知県の海岸線の総延長は 714.3km、徳島県との県境から室戸岬を経て安芸市あたりまでの地域では山地が海岸に迫り、海岸線に沿うように家や道路があるため護岸などが整備されており、自然海岸はほとんどありません。安芸市から仁淀川河口付近までは市街化の進んだ地域で、やはりほぼ全面にわたって護岸などが整備されています。一方、横浪半島から西の海岸では、山地が海岸に迫っていますが地形が複雑なため家や道路が海岸線には少なく、そのため自然海岸が多く残されています。県全体としては、自然海岸が 45.8%、護岸などはあるが自然ななぎさが残されている半自然海岸が 24.7%、人工海岸が 27.8%となっていて、自然海岸の割合は全国平均（53.1%）よりも6%以上低くなっています（第5回自然環境保全基礎調査報告書，1998）。

高知県の海岸の多くは太平洋に面していて波当たりが強く、海岸線の半分程度は岩礁海岸で、砂浜も多くは小石でできています。細かな砂による規模の大きな砂浜は、室戸岬西岸のほか、仁淀川や四万十川など大きな河川の周辺にあり、このような海岸にはアカウミガメが産卵に上がってきます。干潟やアシ原など内湾的な環境が見られる海岸も、浦戸湾、浦ノ内湾、須崎湾、宿毛湾などごくわずかな範囲に限られています。

沿岸域の生物相は黒潮の影響を強く受けて暖海性の種が多く、特に足摺岬から宿毛湾に至る足摺宇和海国立公園の沿岸域では、造礁サンゴを中心とする、まるでサンゴ礁のような亜熱帯性の生物群集が見られます（図1）。

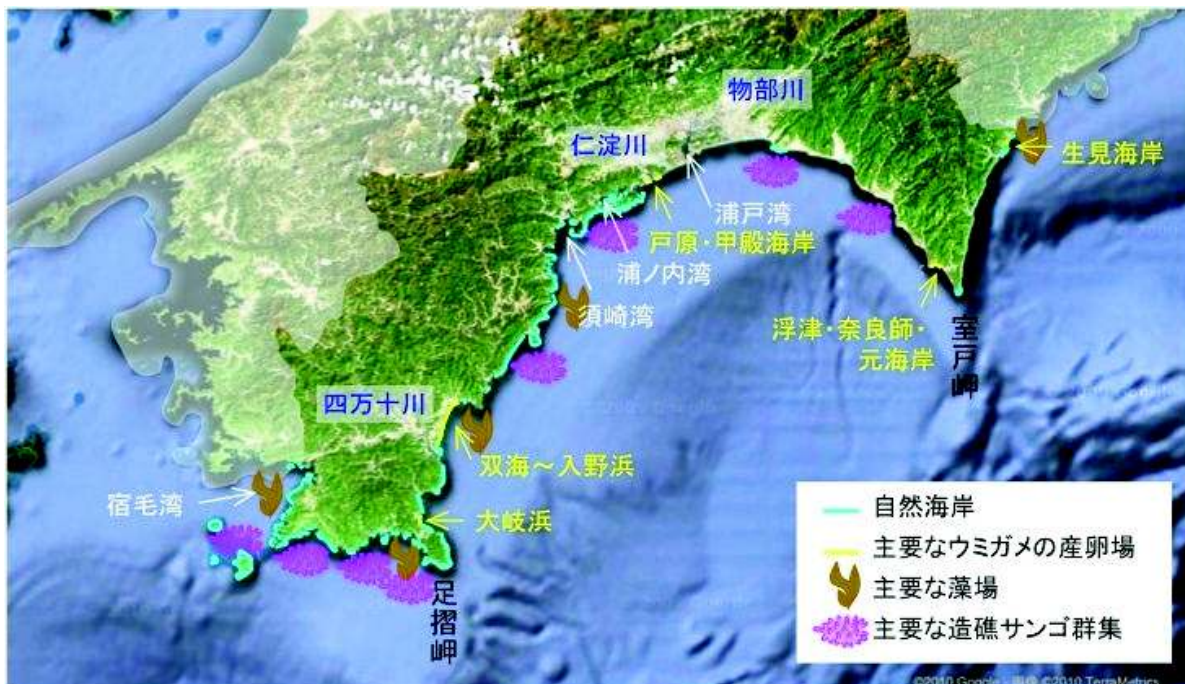


図1. 高知県沿岸の概況

【変化】

近年の海洋温暖化の影響を受けて、高知県沿岸では藻場が激減しています。中でもカジメ・クロメといったコンブ科の海藻による「海中林」と呼ばれる藻場は、黒潮町と東洋町の一部を除いてほぼ消滅しました。ホンダワラ類による「ガラモ場（写真1）」と呼ばれる藻場の減少は海中林ほど激しくはないものの、従来分布していたトゲモクなど温帯性の種からフトエモクなど熱帯性の種に変化しているところが多く見られます。海藻類がほとんど見られず、岩肌がむき出しになった「磯焼け」の状態になっている海域も少なくありません。



写真1. ガラモ場

一方で造礁サンゴは増加の傾向を示しています。高知県には150種ほどの造礁サンゴが分布していますが、近年、以前は生息していなかった熱帯性の種が増加する傾向が見られます。藻場が消失し、磯焼け状態になった海底に造礁サンゴ類が繁茂するようになった場所も少なからずあるようです（写真2）。



写真2. 造礁サンゴ類

藻場が減少して造礁サンゴが増加することによって、魚類をはじめ貝や甲殻類など、沿岸の動物相全体が変化しています。餌になる海藻が減少したことによりアワビやトコブシ、サザエなどの藻食性巻貝類が減少し、造礁サンゴの増加によってオニヒトデなどのサンゴ食生物が大発生するなどの現象が見られるようになりました。

【人とのかわり】

藻場の減少と造礁サンゴの増加による沿岸海域の動物相の変化は、水産業に大きな影響を与えています。テングサや岩ノリなど有用海藻の減少やアワビやトコブシなど高級食材である藻食性巻貝類の減少は各地で海土漁に大きな打撃を与えています。そのため藻場の造成事業が盛んに行われていて、特に最近では、磯焼けした海底に多量に生息しているウニ類の除去を伴う藻場再生事業が各地で実施されており、効果が期待されています。



写真3. オニヒトデの駆除活動

また、増加した造礁サンゴによる美しい海中景観を、観光や環境教育の資源として活かそうとする取り組みが県内各地で始まっています。

一方で、2004年頃から足摺海域で始まったオニヒトデの大発生が2010年には県下全域に拡大し、美しい造礁サンゴ景観を守ろうと、多くの主体による駆除活動が実施されています（写真3）。